CSEAS

京都大学東南アジア研究センターニュース

NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIV.

（2002年11月１日～2003年４月30日）　No. 48

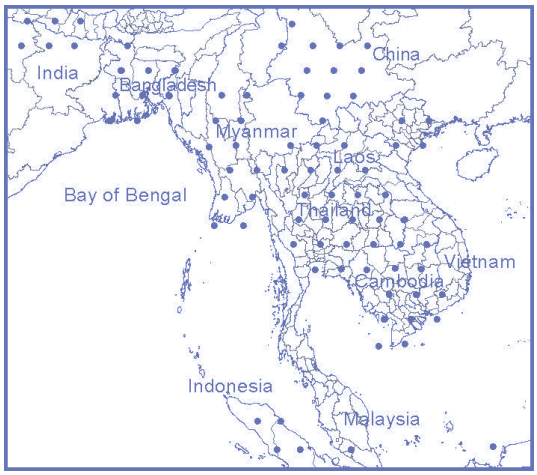
COE「アジア・アフリカにおける地域編成」終る

COE プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成」が2003年3月31日をもって終了した。本プロジェクトは、文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて、地域の成り立ち（The Making of Regions）について先端的で知的刺激、洞察力に富んだ研究を行い、アジア・アフリカの地域研究者であればだれでも一度は訪れてみたい、そこで研究してみたい、そう思うようなアジア・アフリカ地域研究の世界的中核研究拠点を作ることを目的としたものである。

ではこうした目的はどれほど達成されたか。

まず研究成果から見ると、実に多くの個人研究、共同研究の成果が発表されたが、特筆すべきは次の2点である。そのひとつは、この5年間に東南アジア研究センターのスタッフ4人（白石、水野、ハウ、アビナウレス）が五つの賞を、アジア・アフリカ地域研究研究科のスタッフ4人（坪内、市川、小杉、東長）が四つの賞を授与されたことである。もうひとつは、本プロジェクトの直接の成果として、東南アジア・クラスター2冊、南・西アジア・クラスター1冊、アフリカ・クラスター1冊、地域間比較1冊、合計5冊の研究成果の刊行が予定されていることである。

次に研究支援体制、とくに文献・画像資料をはじめとする情報資源の整備は、図書ワーキング・グループと地図・画像ワーキング・グループの貢献によって、大いに進展した。本プロジェクトで収集した文献・資料は合計約8万冊、その半数近くはアジア・アフリカの諸語で、言語数は40を超えた。この結果、東南アジア研究センター、アジア・アフリカ地域研究研究科所蔵のアジア・アフリカ・コレクションは日本でも有数のコレクションとなった。一方、地図・画像ワーキング・グループは人工衛星画像、地図、統計資料などを収集、整理し、いくつかの事例についてデータ分析を行った。またネットワーク・ワーキング・グループの努力により、研究環境の整備も大いに進展した。



東南アジア研究センターが所蔵する
人工衛生画像のオンライン検索システム

さらに研究者ネットワーク構築のため、地域的、世界的に様々の研究者交流・共同研究を実施した。また東南アジア地域研究者のネットワーク構築の一環として、日本語、英語、タイ語、インドネシア語、タガログ語の多言語オンライン書評ジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* を刊行、これはすでに世界的に高い評価を受けている。

ここに見るように、本プロジェクトは、研究成果においても、研究者ネットワークの構築においても、研究インフラ構築においても、十分、所期の目的を達成し、制度的にもその先に地域研究統合情報化センターを展望できるようになった。しかし、こうした努力に終わりはなく、現行21世紀 COE プロジェクトもこうした目的を見失うことなく、中核的研究教育拠点形成に努力してほしい。

（文責：白石　隆）

その他の主な内容 Other Articles

海田能宏教授が定年退官
（Retirement of Prof. Kaida） …… 2
拠点大学セミナーだより
（Core University Seminar Report） …… 3
栄誉 Awards …… 4
東風南信（Reflections） …… 5
Colloquium …… 7～8
21世紀 COE だより（21st Century COE Report）・
Kyoto Review of Southeast Asia: Issue 3 …… 9
Fieldnotes …… 10～11
連絡事務所だより
（Letters from the Liaison Offices） …… 13
Visitors' Views …… 14～19

海田能宏教授が定年退官

1969（昭和44）年4月に東南アジア研究センターに着任されて以来、30余年の永きにわたってセンターとともに歩まれてきた海田能宏教授が、今春、定年退官を迎えられました。

海田能宏教授は、1962（昭和37）年3月京都大学農学部農業工学科を卒業され、同大学大学院博士課程を修了後、1967（昭和42）年5月同大学農業工学科助手に就任されました。当時は主に日本のミカン園散水灌漑の研究に従事しておられましたが、センター着任とともに、タイのチャオプラヤ・デルタやメコン・デルタにおける灌漑排水の研究に着手され、まもなく東南アジア灌漑排水開発研究の第一人者としての地位を築かれました（「＜水文＞と＜水利＞の生態」（渡部忠世責任編集、福井捷朗編『稲のアジア史　第1巻』小学館、1987年ほか）。

しかし海田教授はその後、東北タイのドンデーン村の共同調査への参画を契機に、異分野間の共同研究を重視する方向へと研究を転換され、それは1986年からはじまるバングラデシュでの農村共同研究の研究先導者および組織者として、全面的に開花していくことになりました。バングラデシュでは、農村定着調査によって「問題」を発見し、小さな「実験」を繰り返して問題の解決策を探るという、より開発論的な研究を切り拓かれました。現在まで続く一連のバングラデシュ農村研究は、従来のバングラデシュ地域研究の水準を大きく引き上げるとともに（『東南アジア研究』28（3）「バングラデシュの農業と農村」特集（1990年）、33（1）「バングラデシュ農村開発実験」特集（1995年）ほか多数）、研究の中から生み出された「リンクモデル」が地方的な広がりの中で実践されつつあり、バングラデシュの農村開発手法の新しい標準のひとつになりつつあります。こうした大掛かりな共同研究を通じて数多くの若手研究者が育っていきました。

またこの研究を通じて教授は、ベンガル・デルタ、イラワジ・デルタ、紅河デルタ、珠江デルタとチャオプラヤ・デルタ、メコン・デルタの東南アジアおよびその周辺域の6大デルタの比較開発論を体系立てられるとともに（"Agrarian vs. Mercantile Deltas: Characterizing the Chao Phraya Delta in the Six Great Deltas in Monsoon Asia," in *The Chao Phraya Delta*, edited by Molle and Thipawan, Bangkok: White Lotus Press, 2002 年ほか）、デルタ開発の地域固有性に着眼して独自の「風土の工学」論を展開（「農業・農村研究と風土の工学」矢野暢編『講座東南アジア学　第1巻』弘文堂、1990年ほか）、さらにそれは雄大な構想からなるアジア農業・農村発展論へと発展していきました（「農業・農村発展のアジア的パラダイム」原洋之介編『地域発展の固有論理』京都大学学術出版会、2000年ほか）。

退官講義をされる海田教授

加えて海田教授は、京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻協力講座、同大学大学院人間・環境学研究科東南アジア地域研究協力講座、同大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域論講座を担当され、大学院教育を通じた後進の育成にも卓抜した功績を残されました。

3月14日、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で定年退官を迎えられた古川久雄教授および石田紀郎教授とともに、退官記念講義と退官祝賀会が催されました。古川久雄教授は、海田教授同様、永らくセンターの顔としてご活躍いただいた方であることは、いうまでもありません。

海田教授、古川教授、石田教授の最終講義の題目はそれぞれ、「風土の工学と農村開発と」「アジア的なるものを求めて」「公害研究から地域研究へ」であり、それぞれの歩まれてきた研究の軌跡とお人柄が素直にあらわれた素晴らしい講義でありました。祝賀会は、京大会館からウェスティン都ホテルへと会場を移し、百数十名の参加者に囲まれ、盛大にとり行われました。3人の先生方のこれまでのご功績、ご苦労に感謝し、また今後のご活躍を心より祈念いたします。

（文責：藤田幸一）

ウェスティン都ホテルの祝賀会にて
左より海田、古川、石田各教授

センターを去るにあたって

海田　能宏

市村真一先生に伴われて農学部構内から木造の旧センター（現在のセンターの北東約200メートル）まで歩いて赴任したのが1969年4月1日。道すがら、この日から所長に就任された先生からセンターの大きな将来構想を話していただいたのが印象的でした。3日にはバンコク連絡事務所駐在員として出発。ちょうど30歳でした。以降ほぼ10年間、年単位での駐在、アメリカ遊学、メコン委員会勤務から月単位のJICAや科研費による調査研究を含め、先輩たちが按配してくれた路線に乗って自由気ままに調査する喜びを満喫しました。まだ外国に出かけることが容易ではなかった時代に、これは大きな特権でした。

1980年代、40歳台になると、福井捷朗さんらと若い人たちの調査研究の世話をする立場になり、多くの研究仲間と共に東北タイのドンデーン村調査に明け暮れました。80年代半ばからはJICA研究協力事業としてバングラデシュの農村定着調査、次いで農村開発実験、さらにパイロット的な実践研究として参加型農村開発などという、それぞれ数年単位の共同研究を進めることができました。これは、熱帯農学専攻の中に留学生を含む大学院生をもったことが契機になりました。この中から、バングラデシュの風土に根ざした（と思う）リンクモデルと名づけた農村開発モデルというか、農村開発のためのOS（オペレーションズ・システム）に相当する簡単なプラットフォームが生まれました。これが、私の「地域研究」でした。

今、ASAFASと共にフィールド・ステーション事業が進められています。大いに期待しています。ただ、わが方の院生を送り込んでフィールド研究を鍛えるというだけなら比較優位はありません。多くの大学や研究機関、NGO・NPOがしていることです。先方の若手研究者を呼び込み、学生・院生を招き、共同研究を組織し、その中から博士号に結びつくようないい研究が輩出するようになれば嬉しい。さらに、フィールドを農学や生態学に偏らないよう、とりわけ人文・社会科学の共同研究が生まれるように舵取りしてほしい。

「地域研究」とは何ぞやについても、めげずに議論を続けてほしい。「センターの地域研究」は40年来議論を続けているのにまだまだ未定義の部分が大いにありそうです。ともすれば「あれは地域研究ではない、これも違う、キミのはどうも違うようだ」と否定形になりやすいのですが、いっそ「あれはいい地域研究だね、これもそうらしい、キミの線は見込みがある」という方向に進めると、カラッとした空気が生まれて議論が進むかもしれません。一人ひとりの地域研究を認めるのです。いいセンターとは、すぐれた人材が集まったセンターであるのはもちろんですが、本当は、このセンターあってこそ、この人この研究が生まれたという研究のプラットフォームを意味するのだと思います。

拠点大学セミナーだより

タマサート大学における拠点大学ワークショップも回を重ね、当初のぎこちなさはすっかり姿を消し、会場の設営、アルバイトの雇用、レセプションの準備等、裏方の人たちともいまや阿吽の呼吸でことを運べるようになってきた。また、ワークショップはなごやかななかにも、ことあやふやな議論や見解の異なる点に関しては、遠慮会釈なくコメントをぶつける厳しさをもつものとなってきた。今年は、新規の中産階級とフローの両プロジェクトについてはその中身と方向性についてのブレーンストーミングを目的として、3年目に入った市場・国家プロジェクトについては各参加者に論文発表を求め、1月14、15日両日ワークショップを開催した。

日本からは末廣（東大）、浦田（早大）、篠原（同大）、鳥居（明大）、根岸（神大）等、センターからは白石、濱下、藤田、石川、ハウ、阿部が参加した。マレーシアから3名、シンガポール2名、フィリピン1名、インドネシア1名、タイから合計27名、その他タイ在住の学者の参加もあり、参加者が全体で50名を超える盛況ぶりであった。

中産階級プロジェクトは白石をリーダーに、中産階級擡頭の政治・経済・社会・文化的意義を地域論的、比較論的観点から考察し、明らかにしようとする。一方、フロープロジェクトは石川・ハウをコーディネーターとし、もの・サービスのみならず、国家間を動くものすべてを対象に学際的に考察を加えようというものである。ワークショップにおいて白石は、プロジェクトの方向性を示す基調論文を発表、石川・ハウも同様に趣旨説明を行い、両プロジェクトの意図するところを参加者に徹底した。同時に主要参加者から自らの研究計画の説明を受け、今後の研究の枠組みについて議論、理解を深めた。

阿部が担当する市場・国家プロジェクトに関しては、これまで3年間の研究成果を各メンバーが発表し、お互いに批判を展開し、一層の研究の深化を促した。ポンサーク、マハニ、アンワール、タンガベル、篠原がそれぞれ、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール、日本が抱える現在の政治経済問題について議論し、多くの質疑応答を経て、共通の理解を得ることができた。

個別の問題については、藤田がミャンマーの農業、根岸が開発金融、浦田が地域協力、阿部が貿易・投資、オラーンが政策協力、バヌポンが為替レート政策、シャンドラが生産性、スティパンドがタイのAFTAとWTO政策、ライがマレーシアの経済成長について報告し、参加者からの批判を受け、議論を深め、それぞれ研究の完成へ向けての指針を得た。

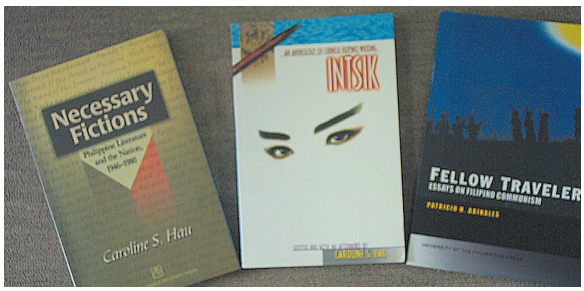
拠点プロジェクトも第2ラウンドにさしかかり、まさに変貌を遂げようとしている。2003年度から、これまでの日・タイ2国間からマルチとなる。ようやくスムーズに開催できるようになったタマサート大学から離れて、次回のワークショップはタイ以外の研究機関で開催されることになるかもしれない。研究内容も幅広くなり、ニューカマーを多く迎え、多少のドタバタ劇も必ずや演じられるであろう。次回は面白い記事になること請け合いである。

（文中、敬称略；文責　阿部茂行）

CSEAS Associate Professors Receive Awards

Associate professors Patricio N. Abinales and Caroline Sy Hau were recipients of the awards conferred by the Manila Critics Circle. In 2001, Prof. Hau's two books — *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946–1980* (Ateneo de Manila University Press) and *Intsik: An Anthology of Chinese-Filipino Writing* (Anvil Publishing) received the awards for best in the humanities and best in literature, respectively. Prof. Abinales' *Fellow Traveler: Essays on Filipino Communism* (University of the Philippines Press) shared the award for the best book in the social science category at the 2002 book fair.

The Manila Critics Circle is a select group composed of the Philippines' leading scholars and writers, who review and evaluate books that are published in a wide range of categories, including the social sciences and the humanities. The awards are granted during the annual Philippine Book Fair where the country's leading book publishers display their new titles. Professor Hau's *Necessary Fictions* was judged exemplary for introducing to Filipino readers new in-



sights on the relationship between literature and nationalism. The book critically discusses the work of Philippine national hero Jose Rizal, the radical writer Amado Hernandez, the Marcos-associated writer Kerima Polotan, and the communist novel *Gera* (War). Her other award-winning book, *Intsik*, is an edited anthology of the writings of established and younger Chinese-Filipino writers of the postwar period. Prof. Abinales' book is a collection of essays on the problems confronting Philippine communism from 1970 to 1999. This book was recognized for having provided alternative, biographical, and regionally-specific insights into the communist movement which many other books on the revolution overlook.

立本京大名誉教授が紫綬褒章を受章

今春、元センター所長立本成文教授（京大名誉教授、現中部大学教授）が紫綬褒章を授与された。

立本教授は、東南アジア研究、ひいては地域研究の構築において卓越した先駆的業績を挙げてこられた。それを大きく二分すれば、一つは、マレーシアの先住民社会を始め東南アジアの特定地域での臨地調査に基づいた社会・文化の民族誌的研究および理論的研究である。これは『東南アジアの組織原理』に見事に結実し、1990年、大同生命地域研究奨励賞と毎日新聞アジア・太平洋賞特別賞が授与された。

もう一つは、東南アジアに立脚しつつ、広く地域研究の方法と視座を基礎づけ、21世紀を先導する統合科学としての地域研究の理論的根拠を築かれたことである。『地域研究の問題と方法』（1996年）と『共生のシステムを求めて』（2001年）はその輝かしい成果であり、国内で大きな反響を呼んだ。

また、立本教授は所長在任中、東南アジア研究センターを、京都大学において諸学問分野の相互交流の場として位置付け、国内外にあっては東南アジア地域研究の中心となる知的存在感を備える研究機関として基礎づけられた。

今回の受章はこれらの専門領域における卓越した先駆的研究業績と学術の振興、大学と学会の発展への寄与が高く評価されたことによるものである。

なお、センター関係者の紫綬褒章受章は渡部忠世元所長（1987年）、石井米雄元所長（1995年）に続き3人目である。

渡部京大名誉教授が京都府文化賞特別功労賞を受賞

センター元所長の渡部忠世京大名誉教授が、平成14年度の京都府文化賞特別功労賞を受賞された。京都府文化賞は、京都府における文化の振興と発展を図るため、京都文化の向上に寄与した人々を顕彰することを目的に昭和57年に創設された。渡部元所長が受賞された特別功労賞は、文化芸術活動において顕著な業績をあげ、文化の高揚に多大の功労があった者に授与される。

渡部元所長は、京都大学農学部、そして東南アジア研究センター在職中に推進されたアジア稲の栽培史と稲作文化についての先駆的研究によって日本農学賞、読売農学賞などをすでに受賞されたが、今回の受賞は、それに加えて、京都大学退官後約15年にわたって主宰された農耕文化研究振興会を中心に、精力的に取り組んでこられた世界の農耕文化と農業の今日的課題についての研究、ならびに講演会・シンポジウム開催を通じた啓発などの諸活動が高く評価されたものである。（財）国際高等研究所の研究プロジェクト「環境と食糧生産の調和に関する研究——人類生存の視野から」（1998年度〜2001年度）の報告が、つい最近、『環境・人口問題と食糧生産——調和の途をアジアから探る』（海田能宏氏との共編著、農文協、2002年）として公刊されたように、日本農業の衰退に対する危機感をもって、農業の価値を再認識する必要性を訴え、農業再生のための問題提起と提案を多くの著書・論文を通じていまも精力的に行っておられる。このような活動が、学術・文化の発展におおきく貢献したことが認められ、今回の受賞となった。なお、授賞式は、1月29日、京都市上京区の府公館で行われた。

マラヤ大学にて

坪内　良博

春休みの僅かな隙間を利用してマラヤ大学のアジア・ヨーロッパ研究所で、金魚鉢のように透けて見える研究室を借りて資料の収集をしている。所長のシャハリル・タリブ氏は、私が東南アジア研究センターに勤めていたとき、外国人研究員として滞在し、そのときには私自身がカウンターパートを務めた記憶がある。クアラルンプールに到着して次の日にこの研究所を訪ねたらフィリピンに出張中で、秘書も休暇中、ファラーという名の女性が現れて研究室の鍵を渡してくれた。その翌日は、イスラムの休日なのだが、勝手に研究室にきて作業をしていると、休日であることを忘れていたといってシャハリル氏が現れた。プロジェクト企画者としての仕事に情熱を傾けており、本人もそれを自負している。

私の方はといえば、19世紀末から20世紀のはじめにかけてのマラヤ連合州の年次行政報告書などから、当時のマラヤ諸州における人口の動きを再現するための資料を整理している。中国やインドからの移民を大量に受け入れて、多民族国家としての骨格が形成されていく過程を、人口の側面から細密に叙述してみたい。我田引水ながら、この種の仕事は定年後の研究に向いているのではないかという気もしている。資料は断片的、分散的で、成果は保証されないという条件と、これまでの経験と体得した知識が総合的な図を描くのに役立つかもしれないという状況があるからだ。ここで行っている仕事のほかに、1880年代のバンコクで郵便配達のために作成された住民名簿を利用して、この都市が当時どのような空間的な構造を持っていたかを探る作業を、タイ人研究者ポーパント氏とともに結構年月を費やしながらすこしずつ進行させている。そのほかにもやりかけの仕事がいくつかある。今日の東南アジアの原点を探る作業がそこにあるという感覚だけはある。鴨とり権兵衛にならぬよう、一つの根を持った終結を目指さねばならないが果たしてどうなることか。

京都大学在職時にも多くのプロジェクトに参加したことを思い出す。違いは研究費の額が相対的に多かったこと、共同研究としての体裁を保っていたこと、好むと好まざるにかかわらず、成果報告のためのセミナーやシンポジウムが多かったことなどであろう。一過性のお祭りや理念性が強い研究会が必要なことは自分の体験からもよく分かる。ある程度の無駄が必要なことも分かっている。それとは違う形の作業に移ったことにある種の感慨がある。これまで身に沁みて感じなかった残り時間の少なさを時には痛切に感じるこの頃である。

（1966～1998東南アジア研究センター助手・助教授・教授。1998～2001京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。現在甲南女子大学文学部教授）

東風南信 REFLECTIONS

ファンラムにて

池本　幸生

今、ベトナムのビントゥアン省にいる。ビントゥアン省は、ベトナム中部沿岸地方のドライゾーンに位置し、チャンパ王国パーンドランガ王家の遺跡群が残る地域である。この乾燥地帯に、ドンナイ川支流ダニム川（ダイニン川）に建設予定の発電所から分水嶺を越えてソンルイ川へ放流する水を利用し、ビントゥアン省東部一帯を灌漑しようというファンリーファンティエト灌漑事業計画がある。この計画ではソンルイ川上流にダムが計画されており、ダム建設によってファンソンとファンラムというふたつの村（コミューン）が移転を強いられている。このふたつの村には、ラグライ族、カホー族という山岳少数民族が、少数のチャム人、キン人、華人等とともに生活している。これらの村の約700世帯の人々の生活が悪化しないようにモニターするためのベースライン調査を行うのが、ビントゥアン省に来ている目的である。

この調査を行うきっかけとなったのが、国際協力事業団のベトナム政府に対する経済政策支援プロジェクトの一環として行った少数民族の貧困問題に関する研究である。この研究で、少数民族の貧困問題に対してはアマルティア・センの潜在能力アプローチを採用すべきであるとの主張を行った。少数民族の貧困問題は複雑である。所得に重点を置いた貧困分析では、少数民族の生活を把握するには不十分である。生活の良さを正確に測ろうとすれば、潜在能力アプローチのような多元的な指標を用いるべきなのである。今回の調査は、その応用という位置付けである。

本ベースライン調査を開始して4カ月が過ぎようとしている。様々な面で不合理や不公正が明らかになってきている。本灌漑事業も、そもそも少数民族の貧困問題を解消することを目的のひとつとして提案された。焼畑に依存する少数民族は貧困であり、だから水田耕作に転換させなければならないというのである。（焼畑民は森林を破壊するので水田耕作を教えなければならないというのと同じ程度に雑な議論である。少数民族はしばしば金儲けの口実に使われ、スケープゴートにされる。）しかし、人々の希望は、低地の灌漑地域に移住することではなく、山に留まることである。山とともに生きるという彼らの生活スタイルと過去何度も強制移住させられた苦い経験が、低地に移動することを拒ませている。しかし、山に留まれば、水没によって土地は著しく減少し、現在と同じ面積の農地を確保するのは困難である。かくして少数民族の貧困問題を解消するためと称して提案された灌漑プロジェクトは少数民族をますます貧困化させる。その一方で、灌漑地域に流入してくるキン人、華人を潤し、格差はますます拡大する。「貧困」や「格差」の議論はどこかで歪んでいる。その歪みに気が付いていないのは、それは貧困や格差を正しく捉えていないからである。「経済発展」も同じである。だから潜在能力アプローチが必要なのである。

（1990～1998東南アジア研究センター助教授。現在東京大学東洋文化研究所教授）

人　事

教官人事

＜昇任＞

水野広祐政治経済相関研究部門助教授は2003年4月1日付け、教授に昇任。

＜国内客員部門＞

浦田秀次郎教授（2003年4月1日付）。1950年2月22日生。73年3月慶應義塾大学経済学部卒業。78年9月スタンフォード大学経済学部大学院博士号取得。同年8月ブルッキングズ研究所研究員。81年4月世界銀行エコノミスト。86年4月早稲田大学社会科学部専任講師。88年3月同学部助教授。94年3月同学部教授。

〔主要著書〕

Winning in Asia, Japanese Style. Palgrave, 2002.（共編著）▽『日本の FTA 戦略』日本経済新聞社，2002.（共編著）▽『FTA ガイドブック』ジェトロ，2002.（編著）

貞好康志助教授（2003年4月1日付）。1964年3月14日生。86年3月京都大学文学部史学科卒業。93年4月京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程入学。98年3月同研究科博士課程単位取得退学。98年4月京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員。99年4月神戸大学国際文化学部専任講師。2001年4月同学部助教授。

〔主要論文〕

「『民族性』と『在地性』――ジャワの鄭和祭にみる交錯」『近所づきあいの風景――つながりを再考する』福井勝義（編），昭和堂，2000.▽「スハルト体制末期インドネシアの『華人』カテゴリーをめぐる諸相――中部ジャワ・スマランでの調査より」『国際文化学』第2号，2000.▽「ジャワ華人の統計的プロフィール――200人の社会・文化的傾向」『国際文化学』第7号，2002.

事務官人事（4月1日付）

□白波瀬昌廣庶務掛長は総務部企画課共通教育推進掛長（共通教育推進部総務掛長兼務）に配置換。後任に大西俊隆数理解析研究所庶務掛長。

□津知哲夫教務掛長は教育学部教務掛長に配置換。後任に横井邦夫学生部入試課入学試験掛主任。

□岩手利之会計掛主任は数理解析研究所会計掛主任に配置換。後任に小柳吉邦氏（新規採用）。

外国人研究者人事

■ 外国人研究員

・Yasmin Sungkar（インドネシア）。LIPI 主任研究員。招へい期間2002年11月19日～2003年5月18日。研究題目「インドネシアにおける産業政策：国家主導から国際的合意のもとへ」

・Lee Hua Seng（マレーシア）。マレーシアサラワク州森林局管理部門副局長。招へい期間2003年1月22日～7月21日。研究題目「マレーシアサラワクにおける野生果樹と薬用植物の栽培化のための保全と指針戦略」

・Chalong Soontravanich（タイ）。チュラロンコン大学人文学部歴史学科准教授。招へい期間2003年1月28日～7月27日。研究題目「第二次大戦後タイにおける犯罪と暴力」

・Dao Trong Hung（ベトナム）。ベトナム国立自然科学技術センター生態・資源研究所主席研究員。招へい期間2003年2月24日～8月23日。研究題目「ベトナムにおける少数民族の農業生態システムに関する研究」

■招へい外国人学者

・Sugiah M. Mugniesyah（インドネシア）。ボゴール農科大学講師・女性センター所長。2002年11月5～22日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

・Dwi Rachmina（インドネシア）。ボゴール農科大学農学部社会経済学科講師。同。「同」

・Sri Hartoyo（インドネシア）。同。同。「同」

・Ikrar Nusa Bhakti（インドネシア）。LIPI 政治研究センター所長。11月14～30日。「民主的統治に関する日本・インドネシア比較研究」

・Deanna Gail Donovan（アメリカ合衆国）。フリー・コンサルタント。11月21日～12月12日。「東南アジア大陸部山地における非木材林産物の交易に関する研究」

・Bhanupong Nidhiprabha（タイ）。タマサート大学経済学部准教授。12月3～12日。「『国家・市場・社会・地域社会統合のロジックとアジア経済』に関する研究」

・Pinit Lapthananon（タイ）。チュラロンコン大学社会科学研究所上級研究員。2003年1月15～27日。「『東南アジアにおける民族間関係と地域の生成』に関する比較研究（東北タイにおけるジェンダーと人口移動）」

・Narumon Arunotai（タイ）。同研究員。同。「同（南タイ漂海民モーケンの社会・文化変容）」

・Endang Turmudi（インドネシア）。LIPI 社会文化研究所部門長。1月15日～2月28日。「『Indonesian Islam and Politics』に関する情報収集と意見交換」

・Son Radu（マレーシア）。マレーシアプトラ大学食品科学・バイオテクノロジー学部助教授。12月16～25日。「東南アジアにおける社会的流動（フロー）に関する動態的研究：アジアにおける腸管感染症の疫学研究」

・Shamsul Amri Baharuddin（マレーシア）。マレーシア国民大学マレー世界文明研究所所長。1月27日～2月8日。「東南アジアにおける社会的流動（フロー）に関する動態的研究：マレー世界における知識の環流について」

↗

◎"Indonesian Politics under Megawati: How She Is Running the Government" by *Shiraishi Takashi,* October 24, 2002.

The Indonesian government under Megawati has been drifting quietly. Many argue it is because Megawati only enjoys the dignified part of the presidency and cannot provide the leadership Indonesia needs in overcoming the present crisis. This is not wrong, but there are far more important structural reasons for Indonesia's drift. No broad national coalition has emerged in the post-Soeharto Indonesia. The paternalistic, *bapak-anakbuah* system of resource redistribution Soeharto created has been in a mess since 1997-98. The state is in deep institutional crisis because of the collapse of informal funding and the erosion of popular trust in its legitimacy. And there are signs that people are losing hope in Indonesia as a political project, the very basis on which the Republic was built. Under these circumstances, anyone, even someone blessed with enormous charismatic leadership, would find it hard to lead Indonesia out of crisis, let alone the one now in the Presidential Palace.

Colloquium

◎"Rethinking Economics in Area Studies" by *Fujita Koichi,* November 28, 2002.

The fundamental issue in the relationship between academic disciplines and "area studies" is raised, taking economics as an example. "Area studies" is characterized here as clarifying "reality" mainly through fieldwork. This is difficult to harmonize with mainstream economics, which pursues general principles rather than the peculiarities of each area. The methodology of econometrics, which uses large volumes of statistical data, is also far removed from fieldwork. But at the same time, economics itself has seen many advances recently that may enable the discipline to be more harmonized with "area studies." It is vital that consciousness of these tensions be kept in researchers' minds and that genuine joint studies among different discipline-based researchers be promoted.

◎"In Search of Islamic Networks in Southeast Asia" by *Miichi Ken,* December 19, 2002.

As a result of several terrorist attacks and bombings in the United States and Southeast Asia, discourse about an "Islamic network" has widely circulated. However, this discourse – whether by mass media or academics – hardly explains what the network is all about. This talk tries to begin that explanation. In other words, it is an effort to show how so-called Islamic activists connect with each other and work together.

Islamic networks are usually loosely and horizontally constructed. They are rarely shaped like a ↗

↘ ・Dhirawat Na Pombejra（タイ）。チュラロンコン大学人文学部講師。2月25日～3月10日。「拠点大学交流事業『中産階級』に関する共同研究」
・Kasian Tejapira（タイ）。タマサート大学政治学部助教授。3月3～30日。「東南アジアにおける社会的流動（フロー）に関する動態的研究」
・Suthachai Yimprasert（タイ）。チュラロンコン大学人文学部准教授。3月4～18日。「同」
・Khoo Boo Teik（マレーシア）。マレーシア科学大学社会科学部准教授。3月8～17日。「同」
・Riwanto Tirtosudarmo（インドネシア）。LIPI 上級研究員。3月9～14日。「同」
・Supang Chantavanich（タイ）。チュラロンコン大学アジア研究所教授。3月9～21日。「拠点大学交流事業『中産階級』に関する共同研究」
・Pasuk Phongpaichit（タイ）。チュラロンコン大学経済学部教授。3月9～23日。「同」
・Edel E. Garcellano（フィリピン）。フィリピン大学英文学比較文学科教授。3月10～20日。「東南アジアにおける社会的流動（フロー）に関する動態的研究」
・Viengrat Nethipo（タイ）。チュラロンコン大学政治学部講師。3月10～24日。「同」
・Naris Chaiyasoot（タイ）。タマサート大学学長・経済学部准教授。3月13～18日。「拠点大学交流に関する意見交換」
・Chirapan Boonyakiat（タイ）。タマサート大学副学長・教養学部准教授。同。「同」
・Olarn Chaipravat（タイ）。シナワトラ大学評議会議長。3月16～31日。「『国家・市場・社会・地域社会統合のロジックとアジア経済』に関する研究」
・Suthiphand Chirathivat（タイ）。チュラロンコン大学経済学部長・准教授。3月20～31日。「同」
・Philippe Cadene（フランス）。パリ第七大学地理学部教授。3月26日～4月24日。「インド北部におけるグローバリゼーションと地域開発」

＜センター来訪者＞

11月6日	Emerlinda R. Roman（国立フィリピン大学学長）
11月18日	尹紹亭（雲南大学人類学部長・教授）、Mongkhol Chantrabumroung（チェンマイ大学山地民研究所所長）
2月21日	Datu Michael O. Mastura（スルタン・クダラット・イスラムアカデミー基金大学学長）
3月3日	Lily Kong（シンガポール国立大学人文社会学部学部長）、Alan Kam-Leung Chan（同副学部長）
3月17日	Suwido H. Limin（パランカラヤ大学泥炭湿地研究所所長）、Ici Piter Kulu（同講師）
3月20日	Edgardo J. Angara（フィリピン共和国上院議員）、Antonio P. Villamayor（フィリピン共和国総領事館総領事）

↘ communist party or military, which are very tight and hierarchical organizations. In past research I have concentrated on various Islamic student movements. These movements are significant because they are free from old social divisions created before the 1950s and very influential among the newly emerged political parties and Islamic militants. But although they are quite important, there are inherent limitations if one concentrates on particular groups. In order to search for another aspect of an "actual" Islamic network, I have started research on Islamic publications. The publication industry needs resources such as money, goods (books) and people which transcend national borders. Through the study of Islamic publications, we can explore international and interregional networks and remap Islamic movements.

◎"Diversity and Development of the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia" by *Kono Yasuyuki,* January 23, 2003.

I started working on the mountainous region of mainland Southeast Asia in the late 1990s. This is a marginal area in terms of agricultural production, and food security at the household level and environmental conservation in relation to the agricultural system were thought to be urgent issues. Through the three-year project titled "People, Environment and Land Use Systems in Mainland Southeast Asia" (PELUSSA) from 1999 to 2001, I found rich diversity in spatial structure and temporal changes in the people-nature interaction of the mountainous region. This implies that bio- and agro-diversities have been appropriately maintained through the customary practices and mutual understandings of natural resources by local people. However, recently introduced standardized modern governance of land and forest resources does not always fit the complexity of land use, agricultural systems, and people's way of life. This gap has a negative impact not only on agricultural production and people's welfare but also on environmental conservation. A smooth transition from customary practices to modern governance of land and forest resources will be the focus of the next research project titled "Constructing a Regional Eco-history Model in Tropical Monsoon Asia."

◎"Bangladesh Rural Development Studies (2)" by *Kaida Yoshihiro,* February 27, 2003.

The speaker reviewed the long process of establishing a "link model" that has its roots in a Japan-Bangladesh joint village study begun in the mid-1980s. The project developed in the same villages through trial-and-error up to the mid-1990s in an action-research called the Bangladesh rural development experiment. The link model coordinates linkages between village self-help communal governance and local rural social service administration. It also provides linkages among field-level extension workers from different nation-building departments. The model has been implemented on a pilot scale in four unions in a *upazila* since 2000. The entire program was implemented with financial support from JICA.

The speaker also presented his approach to implementing a plan to expand the model nationwide to cover one union in each of the 64 districts in the country. The speaker plans to start a fresh survey to provide an appropriate institutional framework for nationwide expansion by learning from successful cases in rural development efforts, particularly in agricultural extension, rural primary health care and family planning.

◎"Re-Evaluation of Gray Level Co-Occurrence Matrix Method for Land-Cover Classification Using Mono Aerial Photo" by *Song Xianfeng,* March 27, 2003.

Gray Level Co-Occurrence Matrix (GLCM) was one of the popular texture approaches to incorporate textural data into image classification. Conventionally, second order statistics were computed from the GLCM matrix and further treated as additional channels of spectral image. Then classification algorithms were employed to classify the composite image.

Because raw GLCM can not be used directly in image classification, its derivatives may cause the loss of some potential information about the raw matrix. In this research, we proposed a completely new way to directly integrate GLCM into image classification. It was entropy-based divergence (Jensen-Shannon) adopted to measure the similarity between GLCM matrices of signature (sample) and current classified pixel, instead of the GLCM-derived second order statistics.

In our demonstration, the two methodology performances were evaluated using aerial photography. Both methods used the same cluster strategy (Maximum Likelihood), training samples and GLCM matrices. The Kappa index and Z-Score were adopted to compute the difference between performances. The Z-Score showed that the two results were significantly different. The proposed one reduced the "pepper and salt" very well. It also showed some improvement on the Kappa index, although both had low classification accuracy because of the limitation of photograph date, topographic effect, mono channel, etc.

21世紀 COE だより

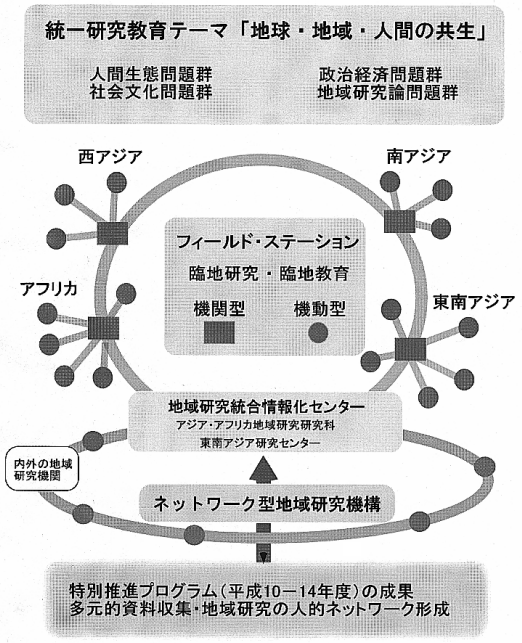
昨年度にはじまった21世紀 COE は、「世界を先導する総合的地域研究・教育の拠点形成」という大テーマのもと、以下の3点について、初年度の計画を推進した。(1) 統一テーマ「地球・地域・人間の共生」にそった問題群に関する研究と教育、(2) フィールド・ステーション (FS) を利用した臨地教育・研究体制の推進、(3) 臨地教育・研究支援のための、多元的情報の整備と発信を担う「地域研究統合情報化センター」の設置準備。

このうち FS に関しては、フィリピン、マレーシア、ラオス、ミャンマー、インドネシア、ベトナム、インド、エジプト、タンザニア、エチオピア、カメルーン、ザンビア、ケニアにおいて、FS の設置、あるいはその準備を行うとともに、教官12名、大学院生14名、若手研究者2名を派遣し、文理融合型の研究テーマにそって、各 FS における教育と研究を開始した。カウンターパートの相手国研究機関との連携も順調に進んでいる。

これらの臨地調査、研究と関連させながら、国内における教育研究活動を推進するために、統一テーマにそった3つの問題群（人間生態、社会文化、政治経済）に関わる研究会が発足し、教官、大学院生、若手研究者による、教育と研究の場として、今後活用されることになる。

「地域研究統合情報化センター」関係では、将来的に地域研究の核となる一大センターとするため、各種のコミュニケーション・モジュールの核となるサーバーの導入や、FS 及び、学内外の研究者と学生との円滑なコミュニケーションと情報交換をはかる機器などの整備が行われた。また、これらの機器を用いた新しいオンライン・データベース・システムの開発に関する準備を行った。さらに、研究資料関連では、図書6,242冊、マイクロフィッシュ1,471枚、マイクロフィルム511リールを購入するとともに、地域研究資料のデータベース化、電子化を推し進めた。

「総合的地域研究拠点の形成」
プログラム全体の見取り図



ホームページの立ち上げも本格化し、現地調査を行った大学院生の報告や FS の活動内容、教官の研究業績など、多くの現地の写真を入れた盛りだくさんの内容となっている。(http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp) これらのデータは常にリアルタイムで更新されることになっており、この21世紀 COE の研究、教育の推移と成果が一目でわかるようになっている。昨年度は、準備期間であり、本年度から本格的な活動がはじまる。　　（文責：山田　勇）

Kyoto Review of Southeast Asia: Issue 3

Issue 3 (March 2003) of the *Kyoto Review of Southeast Asia* is titled "Nations and Other Stories." (http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp) It focuses on the historiography of nation-states in Southeast Asia and the alternative narratives and lives that have been marginalized by them. Review essays on Thailand and Indonesia survey recent methodological and political challenges to nationalist historiography, to *Indonesiasentris* in the latter case. Those on Malaysia and the Philippines examine particular attempts to open new ways of discussing the past, of communalism in Malaysia and of the development of a Philippine perspective in history and the social sciences. Related features highlight memoirs of participants in their nation's histories and short reviews note recent work on Indonesia, Vietnam, and the Philippines.

A feature focus on Research and Documentation includes articles on Southeast Asian studies in China, Philippine holdings at the National Museum of Ethnology (Minpaku), information technology and the study of history, Chinese heritage centers in Singapore and Malaysia, Japanese scholarship on communism in East and Southeast Asia, and an introduction to diplomatic documents of the Ryukyu Kingdom and its contacts with China, Japan, Korea, and Southeast Asia.

Three translated reprints represent writing by prominent historians of Thailand and Indonesia. Charnvit Kasetsiri's "Thailand-Cambodia: A Love-Hate Relationship" discusses the long history behind the violence which culminated in the recent burning of the Royal Thai Embassy in Phnom Penh. Nidhi Eoseewong's essay, "The Thai Cultural Constitution," is one of a series which uses historical perspective to analyze modern society and politics. And Asvi Warman Adam writes about the place of the Chinese in Indonesian historical memory.

(Reported by Donna J. Amoroso)

海外調査だより
Fieldnotes

Fieldwork and Conflict: Notes from a Davao Visit

Patricio N. Abinales

Without knowledge of or sensitivity to the politics of a given "area," any a fieldwork-based investigation will inevitably encounter problems. For to go around "smelling the roses" while pretending that the garden where the roses are growing is bereft of history and politics smacks of naivete that often deter rather than enhance knowledge.

And the consequences can often go beyond just mere academic oversight, and conclusions based on a de-contextualized fieldwork can sometimes become the empirical foundations from whence an "intellectual tradition" on this area would emerge. And once public policy and media catch on to this tradition, it becomes virtually impossible to correct the initial misimpressions for they have as they are now embedded in popular culture.

Take the case of the description of Davao City in the eastern portion the southern Philippine island of Mindanao as a war zone. This description has now spread all over the rest of the country, and here in Japan, academics, media people and public intellectuals have given to describing the breakdown there as inherent in its being a frontier zone of the country. But oddly, before someone bombed its international airport last March 4, one could actually describe Davao City as a successful "peace zone."

Mayor Rodrigo Duterte, the city's tough-talking leader, was, until March 5, able to get the various armed groups that litter that part of our country to agree to leave Davao alone. He sought out leaders of the Communist Party of the Philippines (CPP), the Moro Islamic Liberation Front (MILF), politicians and their private armies, and even the Abu Sayyaf, to convince them to regard Davao City as a "rest-and-recreation" zone. In exchange for not being arrested or harassed by the government and the AFP should they visit Davao for "R&R," these forces were not to disturb the local peace.

And they all appeared to agree. While legal organizations of the communists did their usual petty miniscule protests, Davao was largely peaceful, with Duterte ruling with a firm hand and with popular approbation. The city became a case of unusual case of successful social engineering. Duterte had crafted an unusual brand of populism that combines a "man of the people" type of approach to politicking with an astute balancing of different political interests to maintain order.

It is this populism that enabled draconian measures like the extra-judicial killings of drug pushers allegedly by Duterte's men and an unprecedented citywide ban on cigarette smoking to be implemented with hardly a protest from human rights groups. It is also this kind of politics that allowed Duterte to bring together diverse groups, from the extreme Left to the most cacique of local politics, to the March 14 "March for Peace." Watching the march, I could not help but appreciate once more how protective Dabawenos are of their city. Manilenos and Cebuanos could only watch with envy.

Duterte however is no Joseph Estrada. While their styles of dealing with the poor seem no different, the former's intelligence was clearly miles apart from the then San Juan mayor. His approach to negotiating some modus vivendi between his city and the different armed groups indicate a certain political sensitivity to how they operated. His intimate relations with communist revolutionaries, active and expelled, and with Muslim communities (a daughter is married to the Muslim) allow him to also speak their language, understand their politics, and thus negotiate with them in ways the rebels would appreciate.

To the local communists, Duterte could easily be top united front material. None of the activists I talked to ever referred to Duterte as a killer, a human rights violator, or a potential local fascist. Instead, in conversations with them you get the sense that they are his friends; a casual intimacy you rarely encounter in leftwing coalition politics at the national level. Which partly explains why — of all the anti-war groups in the city — it is the Stalinists who are most discomfited by Duterte's recent pro-American sentiments. How could he, when he was always "with us"?

What is notable here is that if left pretty much alone, local politicians with vision (no matter how flawed as some suggest Duterte is) can actually do something right for their constituents. And for Davao, which already has had long history of being in the middle of local and national conflicts, the fact that a de facto "peace zone" once thrived under Duterte may be a good indicator that we — as a people — are actually capable of changing.

More importantly, this peculiar realization of a project that peace advocates have been trying all their life to attain for most of the war-torn ↗

↘ countryside, and by someone who is often associated with a more severe kind of rule, further shows how more complicated local politics is.

Analysts often refer to local politics as the "rule of the boss," the strongman, or of the warlord. But if such is the case, how to categorize Duterte and the kind of relatively stable regime that he crafted? Can a strongman with a tendency for ruling on the edge also have vision? Can one allow some stability and democracy to thrive (Davao's newspapers are as pugnacious as their national counterparts) under the rule of a benevolent "despot"?

At the local level, these heuristic categories used to describe power by academics and journalist-reformists seem to be less unambiguous than they appear to be. Of course, all these may become moot and academic after the March 4 bombing. The agreement had been broken and Duterte and most of Davao are angry. But people I interviewed believed that what happened at the airport was a temporary aberration. Despite the closeness of the war zones, once the suspects are surrendered or killed, Davao will revert back to its Duterte-ian peace.

This unusual optimism is the complete opposite to the hysteria in Manila. The fear in the capital has been matched by an incredible sanguinity at the local. Which goes to show how supremely ignorant the imperial capital is of local goings-on.

(Associate Professor of CSEAS)

研究会報告
Report of Seminars

◆COE Seminar 1月20日
Caverlee Cary (University of California) "Mapping History as Process"

◆"JSPS Core University Seminar"
1月25日 Pinit Lapthananon (Chulalongkorn University) "Social Change and Socio-Cultural Influences of Gender and Household Relations on Migrants' Decision-Making: A Case Study of Isan Migration" ▽ Narumon Arunothai (同) "Towards More Understanding of the Moken Sea Nomads"
3月19日 Supang Chantavanich (同) "The Complexity of Human Trafficking: Reviews of Evidences from Southeast Asia Contributing to Reconceptualization" ▽ Pasuk Phongpaichit (同) "Populism and Corruption in Thailand"
3月28日 Suthiphand Chirathivat (同) "Governance and Economic Integration in a Global Economy: The Experience of the EU and Challenges for ASEAN" ▽ Olarn Chaipravat (Special Adviser to Prime Minister Thaksin on Asian Bond) "Thailand's Dual Track Policy and a Paradigm Shift in Regional Cooperation and Coordination"

◆Special Seminar
4月17日 Sumit K. Mandal (センター外国人研究員) "Arabs in Nineteenth Century Java: Cultural Diversity, Race and the Colonial State"
4月22日 Yasmin Sungkar (同) "Indonesia's State Enterprises: From State Leadership to International Consensus"

◆ Seminar on "Mountainous Areas of Mainland Southeast Asia" 11月1日
Contemporary Changes in Northern Mountain Region of Vietnam
Dao Minh Truong (Vietnam National University) "Five Decades of Human Impact on Vegetation Cover in Vietnam's Northern Mountain Region" ▽ Tran Duc Vien (センター外国人研究員) "Nutrient Balance of a Composite Swiddening Agroecosystem in Vietnam's Northern Mountain Region" ▽ Neil Jamieson (同) "The Human Dimension: Toward a More Integrated Analysis"

◆「民族間関係・移動・文化再編」研究会
第15回「特別研究会——カンボジア研究特集」12月6日 天川直子(アジア経済研究所)「カンボジアの紛争」▽北川香子(民博地域研)「理事官府定期報告書から見た仏領期コムポン・チャーム地方史」▽笹川秀夫(学振特別研究員)「アンコールをめぐるクメール語による語り——1920〜30年代の雑誌記事の分析から」▽岡田知子(東京外国語大学)「民主カンプチアにおける理想的女性の表象」▽
12月7日 小林知(京都大学)「カンボジア・トンレサープ湖東岸地域における村落社会の編成について——コンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区V村を中心とした事例報告」▽高橋美和(愛国学園大学)「現代カンボジア出産事情——産婆をめぐる近代化」
第16回「東南アジア大陸部におけるキリスト教」2月18日 片岡樹(九州大学)「東南アジア大陸部の山地民キリスト教徒にみる救済モチーフと民族主義——タイ国のラフの事例から」▽西本陽一(金沢大学)「民族間関係におけるキリスト教と少数者集団——ビルマ・タイ国境地帯のバプティスト派ラフ族の事例」

◆「国家・市場・共同体」研究会
12月13日 新井和広(ミシガン大学)「20世紀前半における東南アジアのアラブ・ネットワークの盛衰」▽中村覚(神戸大学)「サウディアラビア民主化の可能性」
3月1日「フィリピン社会の変貌をどうみるか——経済学 ↗

↘ からの接近」
中西徹（東京大学）「経済発展における慣習の変容――マニラの貧困地区の事例」▽藤田幸一（センター）「農村金融にみるフィリピン農村社会――ボホール州調査より」▽菊池眞夫（千葉大学）「稲収穫労働制度の変化――ラグナ州とケソン州の事例を中心として」▽藤家雅子（拓殖大学）「コメント」

◆「東南アジアの社会と文化」研究会
第10回 11月15日 宮田敏之（天理大学）「タイ産高級米ジャスミン・ライスとガーデン・ライスの輸出と品質問題」
第11回 1月17日 宮原曉（大阪外国語大学）「移動性と秘密の言語――セブ興旺寺の事例をめぐって」
第12回 3月28日 中野麻衣子（一橋大学）「『文化のインボリューション』再考――バリ文化の表象と消費を中心に」

◆「支配の制度と文化」第10回研究会、3月11日
桂沢英雄（東京外国語大学）「＜ゴトン・ロヨン＞概念とスカルノのインドネシア」▽佐藤百合（アジア経済研究所）「スハルトのインドネシアにみる支配の制度」

◆「近畿熱帯医学研究会」2月1日
西渕光昭（センター）「東南アジアのコレラと腸炎ビブリオ――魚介類汚染と感染症」▽松林公蔵（センター）「熱帯地域における地域住民の健康状態について――ニューギニア・ミャンマーを中心として」

◆「理科的地域研究の必要性と可能性――生態論理・農村開発・環境問題のアプローチ」2月7日
安藤和雄（センター）「趣旨説明――実践研究を継続する組織の必要性」▽古川久雄（京都大学）「平和環境もやいネット構想」▽海田能宏（センター）「現実との対話から掴む――こだわりの農村開発研究」▽石田紀郎（京都大学）「当事者の迫力に学ぶ――人をかりたてる環境問題研究」

◆「開発と地域研究」研究会
12月13日 福井清一（神戸大学）「ラオス――農業開発」▽大野昭彦（青山学院大学）「ラオス――工業化」▽泉田洋一（東京大学）「ベトナム――農業開発」▽池本幸生（同）「ベトナム――貧困」▽田中耕司（センター）「コメント」
12月14日 原洋之介（東京大学）「開発論と地域研究」▽桜井由躬雄（同）「歴史地域学の実験――バッコック調査の紹介」

◆「農村開発における地域性――農業普及・地方行政・生活文化」研究会
3月17日 テーマ：村のリーダーたちと改良普及事業
西潟範子（日本農業新聞）「生活改善活動で進めたリーダーの確保・育成について」▽松田武子（亀岡市農業改良普及センター）「亀岡市の農家のリーダーたちと改良普及事業」▽安藤和雄（センター）「バングラデシュの農村開発と農村リーダーたち」
3月25日「同：ベンガル基層文化」
テーマ：農耕様式とチベット仏教におけるベンガル僧にみるバングラデシュと周辺の関わり
谷口晋吉（一橋大学）「19世紀初頭コッチ・ビハールの農業社会構造――畑作と水田稲作」▽安藤和雄（センター）「アラカン、マニプール、アッサム、チッタゴンの犂と農業」▽藤田光寛（高野山大学）「チベット文献にみられるベンガル出身の僧侶」

◆「東南アジアの自然と農業」研究会
第108回例会：12月20日 増田和也（京都大学）「インドネシア・スマトラ東岸部における湿地林利用の展開」
第109回例会：2月21日 藤本武（京都大学）「エチオピアのテフ栽培――西南部マロ社会における事例から」
第110回例会：4月18日 小林知（京都大学）「カンボジア・トンレサープ湖東岸地域におけるクロムサマキ解散後の水稲耕作」

◆「南アジア経済研究会」3月29日
三村聡（大阪府立大学）・佐藤隆広（大阪市立大学）「インドにおける人口決定要因分析――全国標本調査（1999年度）の個票データを利用して」▽岡通太郎（京都大学）「インド・グジャラート州の一酪農村における農業賃労働世帯の経済実態――小作・賃労働・金融関係を中心に」

センター人の動き

阿部茂行（11月3日～12月2日）マレーシア・タイ「拠点大学交流事業共同研究『国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済』実施」▽河野泰之（11月4～9日）ベトナム「学術交流ネットワーク構築に関する打合せ」▽P. Abinales（11月7～15日）フィリピン「ウォーラセア地方に関する資料収集」▽白石隆（11月15～23日）台湾・フィリピン「同」▽河野泰之（11月16～22日）フィリピン「フィリピンの農業開発・農村発展に関する調査」▽安藤和雄（11月18日～12月24日）ミャンマー他「少数民族における農村開発と持続的農業に関する調査」▽濱下武志（11月26～30日）中国「上海復旦大学における日中韓関係史会議出席」▽速水洋子（11月28日～12月14日）ミャンマー・タイ「ミャンマー山地における森林利用と自然観の変容に関する調査」▽P. Abinales（11月29日～12月2日）シンガポール「研究集会出席」▽水野広祐（12月1日～2003年9月24日）インドネシア「インドネシア農村経済の15年に関する研究」▽山田勇（12月8～31日）ミャンマー「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源利用の変容過程に関する研究」▽P. Abinales（12月8日～2003年1月8日）フィリピン「フィリピンのアメリカ植民地時代に関する資料収集」▽松林公蔵（12月11～31日）ミャンマー「ミャンマー北方地域住民に関する医学調査」▽濱下武志（12月12～27日）中国他「アジア地域の社会経済システムの比較研究」▽白石隆（12月18～24日）インドネシア他「日イ政策対話及び日比政策対話」▽田中耕司（12月20日～2003年1月12日）ミャンマー「ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容に関する調査」▽藤田幸一（12月21～25日）ミャンマー「ミャンマー経済構造調整政策支援に関する国際会議出席」▽北村由美（12月22～26日）フィリピン「中国語新聞所蔵調査及びマイクロ資料購入」▽阿部茂行（2003年1月3～8日）アメリカ合衆国「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽濱下武志（1月4～17日）タイ他「拠点大学交流事業・共同研究に関わる調査研究」▽北村由美（1月4日～2月16日）インドネシア「ジャカルタ連絡事務所の管理運営」▽河野泰之（1月5～18日）タイ他「チャオプラヤーデルタ地域の農業及びミャンマー中央平原地帯における

19ページにつづく

連絡事務所だより

ジャカルタ

松林　公蔵

医学部を卒業すると「研修医」という制度がある。医学理論は、学部の6年間を通じてみっちりたたきこまれ、医師国家試験に合格して「研修医」となるのだが、それまで実際には人に注射をうったこともなく、毎日処方する薬の商品名も知らず、看護師や技師との指揮系統に関する共通語も教えられていない新米医師が実際に診療を開始する「研修」制度を、私は25年前に経験した。

今回、「ジャカルタ連絡事務所勤務時間管理員」というはなはだ長い辞令のもとにジャカルタ事務所に赴任した私は、25年前の研修医時代を思い出した。インドネシア語もできず、会計処理も初めての私が、現地雇傭員の勤務時間を管理し、官費を前途管理することとなった。車両登録番号の更新、所長主催交流パーティー招待状の発送、3年に一度の借家契約更新の交渉等にくわえて、余計なことに米国によるイラク攻撃も始まった。初めてのことに出会うのは当初面倒なものだがある種の新鮮さもある。懇切丁寧に指導してくださる前任者や事務所経験豊かな諸先輩の親切心も身にしみる。みるにみかねて作業を手伝ってくれる後輩たちの善意にも触れた。

研修医のころと同様、ひとの善意に支えられながらある種の責務感のもとに約1カ月を経過してようやく慣れてくると、全体状況もおおよそ理解でき過去の歴史と現在の時点における問題点を眺める余裕もできてきた。連絡事務所の意義は何かという、歴史とともに変遷せざるを得ない今日的な課題もみえ始めてきた。21世紀COEの恩恵であるフィールドステーションという将来にとって有意義と思われる構想は、同時に連絡事務所のraison d'être（存在理由）にも変革を迫っている。調査許可を得るための支援、日本人研究者への協力交流、現地研究機関との連絡・連携など、かつて事務所最大の業務目的であった事項も、あるいは実務として辞令にうたわれた会計管理、勤務時間管理も、時代の推移とともに現時点では一定程度のわくに留まらざるを得ないように印象される。しかし一方、田中所長来所のおり、「かつて事務所は東南アジア地域研究の前線ベースキャンプであった」という懐古的述懐のなかに、連絡事務所将来構想のヒントがあるような気もする。

短い駐在員経験で私が得た最大の認識は、「連絡事務所の将来構想とその責務は何か」という、ここ数年来センター内で種々の機会に議論され、必ずしも結論にはいたっていない重要な問題のありかを、薄明ながら理解できたことにつきる。

今回は、駐在員であると同時に実践調査者としてインドネシアの高齢者を対象に医学調査を実施し医学の根本を問う地域固有の認識を得ることができた。いずれ、その結果は別のかたちで報告したいと思うが、ベースキャンプである以上実践的である必要がある。運営や管理は目的の遂行上のテクニックであって、私たちは何をめざすのかという根源的な問題はなお残る。

「変化によって失うものは確実だが、変化によって得るものは不確実である」（オークショット）という認識を、私たち21世紀を構想するものは、ある種の覚悟とロマンをもって受容する必要があると思われる。（センター教授）

バンコク

柳澤　雅之

2003年3月20日、アメリカとその同盟国軍はイラクとの戦争を開始した。このニューズレターが発行される5月には、戦況はどうなっているだろうか。執筆しているのは3月28日、アメリカがさらに10万人規模の地上兵力増強を決定した時期であり、戦争は短期で終結すると思っていた世論が、長期戦を覚悟したほうがよいと考え出した頃である。開戦から1週間のタイ、バンコクの様子を、新聞・テレビの報道、町の様子から追ってみた。

タイ国内に関する新聞報道で目立つのはやはり反米・反戦運動である。バンコクの米・英大使館は厳重に警戒され、道路をはさんだ正面にはプラカードを持った人が途切れることなく反米・反戦デモを行っている。しかし、デモはヨーロッパで見られるような万単位の大規模なものではなく、大きな混乱はまったくおきていない。

大きな集会は南部で一度開かれた。3月26日、ヤラ、ソンクラー、ナラティワート、サートン、パタニの5県から2万人のムスリムがソンクラーに集合し、反米デモが行われた。この時、米・英・イスラエル関連会社製造の100の製品が掲載されたリストが配られ、不買運動の対象とされた。しかし、リストには生活関連商品も多く、また、どういうわけかNestle社の製品が載っていたりもする。そのため新聞には、Nestle社幹部の話として、「Nestle社はスイスの会社であるという事実を理解してもらうことに苦慮している」とか、識者の談話として、「不買運動は感情的なもの、戦争が終わればすぐ終結する」「マクドナルドの顧客にムスリムはおらず、不買運動の影響は大きくない」といった記事が掲載されている。

タイ政府の立場は3月20日に表明された。タイ国は戦争に反対するため、同盟国として戦争に参加できないが、戦後復興に協力するとし、いずれの立場もとらず外交的に中立であることを強調した。戦後協力として医薬品の寄付のほか、とくにムスリムによる医療チームの派遣が国連から要請されているという。

タイ経済への影響にも大きな関心が寄せられている。商品価格変動予想のほかに、戦争長期化の展望と、おりから発生したSARS肺炎の影響もあって、タイの旅行業が深刻な影響を受けつつあるという。

中東へのタイ人出稼ぎ労働者の帰還問題も散見される。イラクでは不明だが、クウェートでのタイ人労働者数はおよそ2,500人、うち1,500人が3月23日までに帰国した。残りの1,000人はクウェートでの仕事を継続している。また、サウジアラビアやイスラエルではそれぞれ2万人程度のタイ人が働いているが、そのほとんどは帰国していない。危険な地域で仕事を継続するのは、出稼ぎに要した借金の返済が困難であることと、戦後復興で発生する石油関連施設での仕事を期待しているからである。

以上、開戦後すぐの1週間におけるタイの様子である。南部を除き、今のところ戦争はまだ少し遠い存在である。しかし、バンコクでテロが発生しないと考える理由はまったくない。大胆さが3、細心さが7程度の情報収集活動を継続しているが、危険度が上がればその割合ももちろん変わってくる。（センター助手）

＜Visitors' Views＞

STATE ENTERPRISE: NATIONALISM VERSUS GLOBALISM

By Yasmin Sungkar

State enterprise is a universal phenomenon in the economic systems of nations. In late-industrializing countries in particular, state enterprises were often established to undertake investment where the private sector was weak or to serve specific public needs. Since the 1980s, privatization has been strongly recommended in countries when external price shocks abruptly cause fiscal and debt crises. In this context, the loss-making public enterprises have been a particularly conspicuous drain on government resources, and privatization has been promoted as the best answer to the problems.

What forces kept Indonesia's state enterprises going? First, the vested interests of officials. Since the Presidential decrees and numerous ministerial rulings on the reform of state companies during the 1980s and early 1990s have remained virtually unenforced for the past 10 years, these measures have posed little threat to state bureaucrats colluding with state firm managers. The management of state enterprises without public accountability or transparency continues unabated, enabling officials to allocate contracts and distributorships. Second, state enterprises remain important sources of off-budget finance. Historically, bureaucrats have used state companies as cash cows to support the ruling party, powerful lobbying groups, and their cronies.

Yet the Ministry of Empowerment of State Enterprises is sending a strong message that the nation's privatization program will be accelerated. Furthermore, there is an indication that strategic foreign investors would be given a say in the management of the state-owned companies. This may explain why some bureaucrats have been trying hard to oppose privatization. Privatization also frightens workers who assume that it means layoffs. Thus, although the public has demanded transparency and a brake on monopolies, the rush of reform has created a backlash.

The question of who should own strategic state economic assets is still a contested issue. Economic nationalism remains central despite the burden on the state budget. Despite increasing pressure for changes in Indonesian economic policy, and despite the urgent need for increased foreign exchange, successful reform still faces daunting obstacles in the shape of vested interests. Surely one of the reasons that the post-Suharto reform process continues to flounder is the challenge faced by crucial social institutions – the banks, judiciary, bureaucracy, and army – in finding legitimate sources of power and wealth. If obliged overnight to forego their reliance on collusion, corruption, and nepotism, they would effectively cease to exist. The rational course, then, is to continue conducting business as usual.

Reformists within these organizations may legitimately aspire to a departure from past patterns of corruption on a moral basis, yet daily exigencies, unsurprisingly, work to stop them from committing institutional suicide. In the broader context, the current crisis, which seemed likely to impose increasing pressure for reform, will not necessarily result in a transition to a liberal market. It may simply lead to further retreat into nationalist and populist solutions harkening back to the spirit (real and imaginatively remembered) of newly-appointed President Megawati's father. Whether this third post-Suharto president will succeed where her predecessors did not will not soon be known.

(Visiting Research Fellow)

REFLECTIONS

By Chalong Soontravanich

My first contact with a professor of CSEAS was with the late Koichi Mizuno Sensei in the mid-1970s when my research interest turned to the social history of modern Isan or Northeast Thailand. During that initial phase of my research, I came across a few references to Professor Mizuno's anthropological research papers on Thai society, especially that of his village of Don Daeng, so I wrote him with a request for bibliographical information on his other research publications and any other suggestions he may have. Only two to three weeks later, I got a reply from him together with a package of most of his English language discussion papers as well as offprints of his published journal articles. What impressed me most, however, was his letter to me which was written in a very nice, polite and encouraging tone. He expressed a wish to meet with me in Thailand sometime in the near future to

discuss further my research interest in Isan social history and that of his own work. I regret to this day that his tragic and untimely death at that young age robbed me of the chance to meet with, and to know in person, a young, bright and kind Japanese scholar of Thai studies whom I could only admire and appreciate from afar via his written words.

It was more than two decades after my correspondence with the late Professor Mizuno that I was offered a chance to visit CSEAS here in Kyoto. In the mid-1970s, when my exposure to and reading of works on Southeast Asian Studies was rather limited, I sensed that the concept of Southeast Asian Studies as an area studies that was being pursued by Kyodai Tonanken was rather unique. I have had since the impression that area studies as pursued by CSEAS is in a category of its own, very different from what I have been familiar with, first in my own country, Thailand, and later in Australia.

In Thailand, back in the 1970s, most of the few Southeast Asianists in local universities were either British-, American- or (in much lesser number) French-educated, and their major disciplines were within the domains of mainstream social sciences and humanities, such as history, archaeology and art history, politics, international relations, economics, sociology and anthropology, linguistics, and language and literature. I suppose this (with geography included) is the most typical Anglo-American model of area studies, the one followed by Cornell, Wisconsin, Michigan, SOAS, ANU, Monash and ISEAS in Singapore, to name but a few.

To my understanding, (and if I am wrong, please forgive me!) the model as followed by Kyodai Tonanken is closer to that of Continental Europe, in particular the French and the Dutch idea of an area studies. Perhaps because of their peculiar Imperialist/Colonialist experience in Asia and elsewhere, they (the French and the Dutch) tend to emphasize equally, if not more, the physical conditions of the area under study; they are not heavily biased towards cultural and social conditions as in the case of the Anglo-American tradition of area studies. Engineering (civil/irrigation) and agricultural science feature quite prominently in their research agenda; not simply as part of policy oriented or applied research projects for development planning/social engineering purposes, but in order to understand much better its past socio-politico-economic and cultural development. Many past and current research projects of faculty staff members of Kyodai Tonanken are obviously in this same line.

During the first few weeks of my current sojourn at Kyodai Tonanken, I didn't have to finish anything as part of my commitment and could therefore browse at my own leisure on the home page of Tonanken to get acquainted with my new colleagues and their academic training and specialization. It was only then I discovered that Tonanken has actually gone far beyond other major research schools or centers of Southeast Asian Studies in its concept of area studies. Not only have quite a number of faculty members of Tonanken done professional training in civil/irrigation engineering and agricultural science and have more or less effectively blended their particular academic disciplines into the multi/inter disciplinary approach to Southeast Asian Studies nicely, but Tonanken even boasts a few faculty members originally trained in medical science, health science, and microbiology who, it seems to me, have rather comfortably applied their respective disciplines for the benefit of Southeast Asian Studies. This broad disciplinary approach to area studies is unheard of in many places. In Thailand, a few decades after area studies was introduced, it is still dominated largely by historians, political scientists, economists and anthropologists. Neither a serious dialogue on area studies nor a joint multi/inter disciplinary approach in its true sense have been attempted between social and human scientists on the one hand and engineers and natural scientists on the other. I suppose that is true in other academic communities in the west as well as in the east.

I hope I will learn more during the next few months, through dialogues with my colleagues here, about the current research agenda of CSEAS, as well as its strengths (and perhaps weaknesses?) and the research and administrative strategy that has brought it this far. (Visiting Research Fellow)

PAPER FOLDING AND REGIONALISM

By Sumit Mandal

I was barely in my teens, sometime in the early 1970s, when I became fascinated by *origami* after reading an article in the *Reader's Digest.* Like good British postcolonials, my parents subscribed to popular English language magazines such as the *Digest, Time* and so forth. Around the time I learned about *origami,* my mother was dabbling with *ikebana,* at the Young Women's Christian Association (YWCA). Through these utterly Western (or rather American) and Christian enterprises, my family was exposed to something Japanese other

than Mitsubishi, Sony, Canon and Prime Minister Tanaka.

In Malaysia in the 1970s, people were picking Toyota and Datsun over the natural choice for the longest time: Austin and Morris. All around me, I heard that Japanese cars were nothing but disposable tin cans compared to the dependability of the British makes. People bought these tin cans nevertheless, and by 1974, Japanese companies in Southeast Asia were believed to be sufficiently intrusive to result in protests across national borders. My mother and I, however, were exposed to a Japan beyond cars and electronic products.

One day, *origami* was made real for me by a Japanese woman who moved into the neighborhood. My mother invited her over. She was the wife of an executive at Daihatsu or some other company, perhaps one of the first waves of Japanese executives to the region. She could barely conceal her excitement upon encountering a boy excited about *origami*. We put aside the *Digest* and she showed me herself how to fold a crane on the tea table in my mother's living room.

Like most kids when I was growing up, I was a big fan of Ultra Man. There was not much else Japanese on TV. Kids today are exposed to Japanese creativity in much greater variety—everything from *anime* and Doraemon to Nintendo Game Boy. Cultural and intellectual exchanges have advanced considerably at the same time. The arts as well as social and environmental activism far outstrip academic connections in terms of their overall impact and collaborative energies.

Just as I forgot Ultra Man, I forgot how to make the crane as I left my teens behind. I relearned the crane only in my twenties from a book I found in a New York City book shop. Now I know it by heart.

In a world in which realpolitik rules and economic growth is the motor, my crane may matter little. Or does it? Few would openly dismiss the arts, social activism and so forth, even *origami*. After all, these are all things that are naturally good, right? Still, there are few who see just how significant they are. Like women, the arts must be respected and valued, never understated openly. Their real significance nevertheless remains grossly underacknowledged and elusive.

One of the illusions of the powerful is that their politics alone matters. Paying attention to other social actors, like women, reveals just how significant other kinds of power may be. *Challenging Authoritarianism in Southeast Asia: Comparing Indonesia and Malaysia* (Routledge Curzon, May 2003), edited by Ariel Heryanto and myself, tries to critically evaluate the work of a whole range of social actors. (I wish to express my gratitude to the CSEAS as the final stages of this book were completed in Kyoto during my Fellowship).

Southeast Asia-Japan links in the arts, to name but one area, make radical regional assertions with productive results. Theatre, dance and other kinds of collaboration are dynamically connecting the dots for a different-looking region. Although these assertions take shape slowly and on the fringes of regularized channels of power, they can produce significant, substantial and lasting connections.

Perhaps there is something after all to learning how to fold paper (from a woman).

(Visiting Research Fellow)

BIODIVERSITY CONSERVATION IN VIETNAM

By Dao Trong Hung

Although its forest area has been drastically reduced over the past 50 years, Vietnam retains a very diverse flora. Up to the year 2000, 13,786 species of plant had been identified, including

- 9,812 species of Magnolophyta/Angiospermae
- 793 species of Bryophyta
- 664 species of Polypodiophyta
- 63 species of Pinophyta/Gymnospermae
- 57 species of Lycopodiophyta
- 2 species of Psilotophyta
- 2 species of Equisetophyta
- 2,393 species of lower order plant such as algae, fungus, etc.

There are more than 2,000 wood species, 3,000 medicinal plant species, more than 100 bamboo species and 50 species of rattan.

By the estimation of botanists, the flora of Vietnam may contain up to 20,000 species of Cormobionta (high order plants). Among them there are species used for medicine, food, timber, essential oil, and fodder, but certainly, the uses of many species are not yet known to scientists.

Moreover, the flora species of Vietnam have high endemicity. Endemic species make up more than 40 percent of total plant species in Vietnam [Thai Van Trung, *Tropical Forest Vegetation of Vietnam* (in Vietnamese). Hanoi: Science and Technology Publishing House, 1980]. Most endemic species are concentrated in the following four areas:

- The Hoang Lien Son high mountain range in the north,

- The Ngoc Linh high mountain range in the Central Highland,
- The Lam Vien plateau in the south, and
- The Truong Son North rain forest range in the Central part of Vietnam.

Many local endemic species are found only in small areas and have small populations. Usually, these species are very rare because the forests where they are found have been fragmented into small patches and have been severely overexploited.

In humid tropical forests, no one species dominates and each species is generally represented by only a few individuals. This makes these species exceedingly vulnerable to human exploitation. This is the present situation of precious wood trees such as *po mu* (*Fokiena hodginkii*), *thuy tung* (*Glyptostrobus pensilis*), *cam lai* (*Dalbergia bariaensis*), *hoang dan* (*Cupressus terbulosa*), *bach xanh* (*Calocedrus macrolepsis*), etc.

The fauna of Vietnam is also composed of many species, many of which are endemic. There are many animal species that have high value from both economic and conservation standpoints, such as the elephant, tiger, panther, gibbon, Java rhinoceros, langur, bull, wild buffalo, Sambar deer, Sika deer, masked palm civet, snub-nosed monkey, wild oxen, fresh water crocodile, pheasant, peacock, and the python and other snakes.

In recent years, many species of new large mammals have been discovered, such as *sao la* (*Pseudoryx nghetinhensis*), a deer with a long horn, *mang lon* (*Megamuntiacus vuquangensis*), *mang truong son* (*Canimuntiacus truongsonensis*), two new kinds of muntjac, and *Pseudonovibos spiralis*.

During the last 10 years, the Government has adopted many guidelines and policies for nature protection in upland areas. These include documents on the establishment and management of forests and nature reserves, supporting policies for nature protection, documents on management and protection of rare and precious flora and fauna species, and documents on identification of entities in charge of forest land use and management as well as protection of forestry resources. In addition, reforestation has been strengthened with the establishment of a system of specialised forests and protective forests. At present, there are 23 national parks, more than 100 nature reserves and cultural and historic forest sites.

A big factor favoring biodiversity conservation in Vietnam is that great efforts by both the State and the people can be funded at relatively low cost. However, many difficulties remain: hunger and poverty of local upland residents; population increase in and around conservation areas; widespread illegal trading in timber and wildlife; low awareness of the people; lack of a harmonious combination of preservation and development both in the legal instruments of the State and in actual activities; and the shortage of management skills of the people in charge of nature protection. If Vietnam's rich biodiversity is to be effectively protected, measures must be taken to overcome these difficulties.

(Visiting Research Fellow)

THE INTRIGUE OF THE JAPANESE LANGUAGE

By Lee Hua Seng

私は何回も日本へ行きました。残念ですが日本語はまだ良くわからない。"Watashi wa nankai mo Nihon e ikimashita. Zannen desu ga nihongo wa mada yoku wakaranai." I have been to Japan on many occasions but my knowledge of the Japanese language is still poor.

That is the phrase I picked up in a book on the study of the Japanese language and have been saying ever since. It must have been more than five years ago that I picked up that phrase. However, for me the phrase is still valid. For an oriental like me, not being able to speak Japanese is something not easy for many Japanese people to accept, especially at *depato, supa, kissaten,* etc. From the myriad books that my wife Dianne and I bought over the years on learning the Japanese language, we have of course picked up a fair amount of vocabulary. In addition, Dianne and I had attended a few classes on elementary Japanese in our hometown Kuching in Malaysia. But the classes never seem to sustain themselves. Hence our lack of progress.

I have the advantage of knowing a fair number of *kanji* characters. So using public transport like the buses from Shugakuin to the city or taking the Hankyu Line to Kobe does not pose much of a problem. (Incidentally why is it called Juso, on the line to Sannomiya, when the *kanji* characters read Ju-san?) I had also taken the trouble to master *hiragana,* a big help especially in eating places. Knowledge of *hiragana* and some *kanji* certainly widens the repertory of dishes to order. My knowledge of *katakana* is probably about 75%, which also helps when it comes to shopping for toiletry, detergents and such items. But Japanese pronunciation of foreign words and the subsequent rendition in *katakana* is another subject to write about. Since my arrival in Japan for this tenure at CSEAS, I have managed to learn 並 (*nami* – regular), 大盛 (*omori* –

big serving) and 特大 (*tokudai* – extra big serving) in *ramen* shops (one of my favorite haunts). This helps me order the appropriate amount to satisfy my particular level of hunger. There is another serving called mini, which is not too difficult to figure out. But lately a new dimension crept in after an order of *ramen*. "*Kotteri* (thick soup)?; *negi* (spring onion)?; *ninniku* (garlic)?" I was asked. How should I answer? Strength of soup I know (*kotteri* for thick and *sappari* for light) but do I say "yes or no" or "more or less" to the onion and garlic questions? How do I answer in Japanese? That's my next topic of research.

We have also come to realize the folly of asking such questions as *"Kochira wa nan desu ka"* or saying something in the little bit of *nihongo* that we know when shopping, for we would often be deluged with an incomprehensible barrage. Safer to say *"Nihongo ga dekimasen"* and launch into sign language.

Before I left for Kyoto, I had told my Japanese friends in Sarawak that "Nihon *ni iru toki nihongo ga shinpo shitai*" (while in Japan I hope to improve my Japanese). We sought help to identify Japanese language teaching institutions or private instructors near Shugakuin. But unfortunately nothing suitable has materialized as yet. It would be a pity if my knowledge of the Japanese language does not improve. In relation to my research at CSEAS, I recently searched the NACSIS Webcat for publications on medicinal plants. Quite a significant number of books and publications from outside Japan were located. A search of publications on medicinal plants in Japan so far only yielded nine items, six available in Kyoto but all written in Japanese. A comparative study of medicinal plants in Asia alone warrants some knowledge of the Japanese language.

In 1978 when I first came to Japan I bought a book written by an American called Don Maloney entitled *Japan: It's Not All Raw Fish.* It is an interesting account of his life in Japan after being transferred from his head office in Chicago to work in Tokyo and the exasperation of his encounter with Japanese customs and language. Things haven't really changed much from what Don Maloney experienced. On the subway ride from Kokusaikaikan to Kyoto for instance, how is it that all the announcements in Japanese concerning the existence of driving schools, Chinese restaurants, the position of elevators in some stations, which side the train door will open on, prohibition on the use of handphones, thanking everybody for using the subway and many other things translate into English simply as "The next stop is . . ."? Intriguing!

So how do I go about "Nihongo *o shinpo shimasu*" over the next few months? 皆様　教えて下さい。I should ask my Japanese colleagues not to hesitate to say something to me in Japanese sometime. Only that when you do, ゆっくり言って下さい。

(Visiting Research Fellow)

ONSEN: EQUALITY AND OPENNESS IN JAPANESE SOCIETY

By Chantanee Panishpon

Before arriving in Japan, I had always heard that the most significant characteristic of the Japanese people was an absence of self-expression to strangers, especially to foreigners I dare say, which could possibly result in misunderstandings between them and people from entirely different cultures. Accordingly, I had always believed that the Japanese would reveal neither their emotions nor their bodies to unfamiliar persons. This illusion came to an end when I had an opportunity live among the Japanese people.

One day in early March, my friends asked me to take a trip to Shirahama, which is extremely famous for its *onsen* or hotspring bath. They told me this town was too crowded during the summer with tourists who wanted to enjoy the *onsen* at the seaside. Springtime was therefore a better time for us to go. In fact, I knew that Shirahama had beautiful scenery, such as the Shirarahama beach, where white sand is imported from Australia, and Isogikoen, a park with a panoramic view of the Pacific Ocean and its terrific rocky coast. I eagerly agreed to travel with them.

It was raining when we started our journey and we were caught in a storm while driving to Shirahama, so we were not able to take an *onsen* at the beach. However, we did not miss this activity since the hotel where we stayed overnight also had an *onsen.* You could choose any kind you liked, indoor or outdoor. The outdoor *onsen* was very nice and romantic, located on the terrace with a daytime view of the glittering ocean below and a nighttime view of the starlight sky above. I fell in love with this hotspring at first sight.

At nightfall, my friends suggested we go to the *onsen* because there were few people then. We went to the bath to clean and wash our hair before taking the *onsen.* I became reluctant when I saw four ladies in the room. All were naked. This was the first time I saw naked people in public. While I stood indecisively, a young Japanese woman entered the room.

She seemed surprised to see me wearing clothes. Smiling, she introduced herself and asked if I came from Thailand. I asked her how she could guess.

"I have many Thai friends because I have been to Thailand many times. I know that Thais are very shy and not comfortable being naked," she said while taking off her clothes. She did this naturally and did not mind if I looked at her. "Please feel free to do this. Everybody does and they will do nothing to make you feel unhappy."

Finally, I just undressed and walked to the *onsen* with her. In the bathtub, there were other four women sitting there — three were Japanese and one was European. They smiled and said *konbanwa* to us. Their friendliness made me feel much more relaxed.

My new friend told me that Japanese people are very fond of taking *onsen* because it was supposed to be good for the health as well as for recreation.

In my opinion, *onsen* is good not only for the health, but to foster a close relationship with family and friends. I saw a mother and her teenage daughter at the *onsen* together. The mother rubbed her daughter's back while they talked and laughed. Though I could not understand what they said, I knew from their body language that they were talking about something funny. My Japanese friend told me they were talking about the daughter's love affair. It was very interesting to see a mother and her teenage child spend time together like this. Surely this relaxed atmosphere would help them talk to each other about anything, the daughter's boyfriend, for example, her hair style, or even how to have safe sex. Straight and open communication was the result. If you can reveal your naked body to anyone, it seems likely you can open your mind as well. No secrets should be kept in such a place.

Visiting the *onsen* not only gave me real pleasure and a new friendship, but revealed another vision of Japanese culture. Beyond a way of taking a bath, the *onsen* and its traditional manner may be considered a symbol of equality and openness in Japanese society. Anyone who comes into the *onsen* must take everything off — their clothes, their social status, even their nationality — and leave it behind. No rich man, no poor man, no races, everybody is the same while they are in the same pool. You may say it's like John Lennon's song "Imagine."

The experience I had in the Shirahama Onsen certainly made me understand the Japanese people better than before. In fact, they are not closed as we expected, but really free to open themselves in the right place and at the right time.

（Visiting Research Fellow）

12ページからつづく

小規模灌漑農業の実態調査」▽石川登（1月6〜16日）タイ他「拠点大学プロジェクト・セミナー参加等」▽阿部茂行（1月11〜16日）タイ「拠点大学ワークショップ参加」▽藤田幸一（1月12〜26日）タイ・ベトナム「東南アジア大陸部コメ輸出経済の比較調査」▽白石隆（1月13〜18日）タイ「拠点事業セミナー出席・資料収集」▽山田勇（1月13〜19日）インドネシア「調査及びフィールドステーションの打合せ」▽C. Hau（1月13日〜2月1日）タイ・フィリピン「拠点大学プロジェクト・セミナー参加及び打合せ」▽濱下武志（1月31日〜2月6日）中国「清華大学において中国統計資料編集会議出席」▽P. Abinales（1月31日〜2月16日）フィリピン「1960年代フィリピン学生暴動に関する調査」▽藤田幸一（2月7〜18日）インド「西ベンガル州とシッキム州における農山村の農業生態学的調査」▽阿部茂行（2月7日〜3月6日）タイ他「セーフティ・ネットの比較経済分析に関する調査」▽宋現鋒（2月9〜18日）中国「生態環境と土地利用に関する資料収集」▽C. Hau（2月9〜19日）フィリピン「資料収集」▽白石隆（2月9〜21日）インドネシア「インドネシア政治経済改革に関する情報収集」▽石川登（2月9〜28日）マレーシア「サラワク州北部軽工業地帯における人口移動に関する研究」▽安藤和雄（2月10〜26日）インド「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」▽山田勇（2月12日〜3月4日）インドネシア他「ウォーラセア海域における生活世界と環境管理の動態的研究」▽松林公蔵（2月11日〜4月16日）インドネシア「ジャカルタ連絡事務所の管理運営」▽河野泰之（2月13〜23日）ラオス他「東南アジア農村の生態資源システムとセーフティ・ネットに関する調査」▽濱下武志（2月16〜21日）シンガポール「アジア中産階級研究プロジェクト調査」▽五十嵐忠孝（2月16日〜3月3日）インドネシア「在来暦法に関する調査」▽P. Abinales（2月19〜23日）アメリカ合衆国「『利権の所在：アジアに駐在するアメリカ軍の将来』会議出席」▽西渕光昭（2月21日〜3月1日）フランス「ヨーロッパ及び関連地域における病原性ビブリオ属菌株の保管状況に関する調査」▽林行夫（2月23日〜3月8日）タイ「行政改革によるタイ宗教制度再編に関する調査」▽安藤和雄（3月2〜8日）ミャンマー「ヤンゴン・フィールドステーション開設準備」▽藤田幸一（3月2〜10日）ラオス「ラオス経済政策支援に関する現地調査」▽A. T. Rambo（3月4〜27日）タイ「ベトナム北部山岳地帯における開発動向に関する共同研究」▽宋現鋒（3月5〜13日）ラオス「生態環境と土地利用に関する資料収集」▽白石隆（3月9〜15日）インドネシア・シンガポール「ウォーラセア海域における人の移動に関する情報収集」▽P. Abinales（3月10〜21日）フィリピン「マニラ・フィールドステーション開設準備」▽西渕光昭（3月15〜20日）タイ「タイにおける腸管感染症発生状況と感染症の国際的伝播状況に関する情報収集」▽石川登（3月20〜27日）インドネシア「インドネシアにおける労働移動の現状に関する調査」▽阿部茂行（3月21〜27日）タイ・インドネシア「バンコク・ジャカルタ連絡事務所の視察」▽田中耕司（3月22〜26日）同「同」▽美馬敏男（同）同「同連絡事務所の会計事務打合せ」▽濱下武志（3月27〜31日）アメリカ合衆国「アメリカ・アジア研究学会出席」▽北村由美（3月30日〜4月26日）タイ「東北タイ資料センターにおける資料収集他」▽P. Abinales（4月3〜7日）フィリピン「『フィリピン史の系譜』会議出席」▽C. Hau（同）同「同」▽石川登（4月13日〜5月31日）インドネシア「ジャカルタ連絡事務所の管理運営他」▽藤田幸一（4月15〜22日）インド他「インド・ミャンマー農業研究に関する打合せ」▽林行夫（4月21〜29日）タイ「タイ農村社会の変容と革新に関する調査及び資料収集」

◇『東南アジア研究』40巻3号
Southeast Asian Studies 40(3)

Population and Globalization

Preface. Abe Shigeyuki, Sumner J. La Croix, and Andrew Mason ▼ Population and Globalization. Sumner J. La Croix, Andrew Mason, and Abe Shigeyuki ▼ Explaining Inequality the World Round: Cohort Size, Kuznets Curves and Openness. Matthew Higgins, Jeffrey G. Williamson ▼ Employment Transitions in an Era of Change in Thailand. Soumya Alva and Barbara Entwisle ▼ The Economic Crisis and Desires for Children and Marriage in Thailand. Tsuya Noriko O. and Napaporn Chayovan ▼ Unauthorized Migrants as Global Workers in the ASEAN Region. Graziano Battistella ▼ Labor Migration and Regional Changes in East Asia: Outflows of Thai Workers to Taiwan. Ching-lung Tsay ▼ Does Globalization Adversely Affecting Population and Poverty? Views of Five Panelists. Richard Leete, Andrew Mason, Ogawa Naohiro, Simeen Mahmud, and Rafiqul Huda Chaudhury

◇『東南アジア研究』40巻4号
Southeast Asian Studies 40(4)
Urug. An Anthropological Investigation on Suicide in Palawan, Philippines. Charles J-H Macdonald ▼ Traditional Vietnam's Incorporation of External Cultural and Technical Contributions: Ambivalence and Ambiguity. Nguyen The Anh ▼ Development Policy and Human Mobility in a Developing Country: Voting Strategy of the Iban in Sarawak, Malaysia. Soda Ryoji ▼「タイー族・ヌン族の国内移住の構造――ベトナム東北山間部少数民族のネットワーク」伊藤正子 ▼「阿片・秘密結社・自由貿易――19世紀シンガポール、香港でのイギリス植民地統治の比較研究」鬼丸武士 ▽ 現地通信（Field Report）「ミャンマー社会雑感」藤田幸一

出版ニュース
Reports of Publications

◇研究報告書シリーズ（Research Report Series）

■Chantanee Panishpon. 2003. *List of Websites of Socio-Economic Indicators of the ASEAN Countries.*

■――――, compiled. 2003. *Southeast Asian Studies on the Internet Sources.*

■Hamashita Takeshi; and Shiraishi Takashi, eds. 2003. *Hegemony, Technocracy, Networks: Papers Presented at Core University Program Workshop on Networks, Hegemony and Technocracy, Kyoto, March 25-26, 2002.*

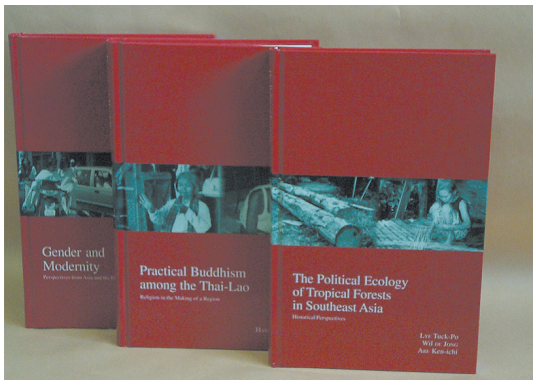
英文地域研究叢書3冊が相次いで刊行

前年に引き続き、3冊の英文地域研究叢書（Kyoto Area Studies on Asia）が相次いで刊行された。Hayami Yoko, Tanabe Akio, and Tokita-Tanabe Yumiko (eds.), *Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific*（Kyoto Area Studies on Asia, No.4); Hayashi Yukio, *Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of a Region*（同 No.5); Lye Tuck-Po, Wil de Jong and Abe Ken-ichi (eds.), *The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives*（同 No.6）である。

Gender and Modernity は COE プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成」の一環として1999年6月に開催されたワークショップを元に編まれた編著である。本書では、アジアと太平洋地域の日常生活に見られるジェンダーと近代を、各々の著者が専門とする地域の緻密なフィールド調査に基づいて論じている。自明とされがちな西欧中心的な近代を改めて問い直し、西欧からこの地域にもたらされた近代が、それぞれの地域固有の伝統的な価値観と鬩ぎあいながらどのように変容し、その変容にジェンダーがどのように関わっているかに迫る研究書である。

林行夫著『ラオ人社会の宗教と文化変容』（地域研究叢書12, 2002年）はこの地域を扱った数少ない研究書であるとして、アジア・欧米研究者から翻訳が待たれていた。*Practical Buddhism among the Thai-Lao* はその後の研究成果を盛り込んでさらに充実させた翻訳である。タイ・ラオスに跨る17年に及ぶフィールド調査に基づいた詳細な民族誌から、地域に根ざす精霊祭祀と上座仏教の実践が、国家編制や社会変化の中でいかに生成・分化し、変容したかを明らかにする意欲作である。

The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia は、2000年11月に国立民族学博物館地域研究企画交流センターが主催した国際シンポジウムを元に編まれた編著である。東南アジアの熱帯雨林は世界でももっとも豊かな多様性と蓄積をもつ森林であるだけに、非常に古くから、様々な森林資源が交易の対象とされてきた。本書は、東南アジアの熱帯雨林問題を、様々な研究手法を持つ著者らが新たに「政治生態学」Political Ecology を規定し直して共通の方法とし、しかも歴史的観点を重視しつつ構造的に明らかにしようとしている。どちらかといえば静的であったこの世界の見方を、世界の動態的な枠組みの中で捉えようとする極めて意欲的な研究書である。



この3冊の刊行で、Kyoto Area Studies on Asia シリーズは6冊を数えるに至り、今後益々の充実が期待される。購入に関する問い合わせは京都大学学術出版会（電話 075-761-6182, E-mail: sales@kyoto-up.gr.jp）まで。

2003年5月1日発行
発　行　〒606－8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel　(075) 753－7344
Fax　(075) 753－7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編　集　安藤　和雄・米沢真理子